

予め用意してきた質問事項を問いかける。

- センター建設の計画を立てられたのはいつごろからで、その担当者は何名ぐらいだったか。
- 建設委員はいつごろ発令になり、それは何名ぐらいだったか。
- 建設にあたって外部の意見は聴取されたか。その組織や方法は。
- 所員の発令はいつごろで、何名だったか。
- 現在の職員組織、元所員の在籍数、担当教科、年令は。
- 講座数は。1年間の研修者の数は。

課長さんは建設当時からセンター造りに苦勞されてこれだけの方だけに、私の質問に対して要領よく説明して下さる。

中でも、私が最も感銘したことは、昨年の4月から2月までの間に調査、研究、相談などいわゆる自主研修にこれだけ先生方が2000人にも及ぶということである。このセンターの位置は広域な鹿児島県全体の地理的条件から考えると必ずしも交通便利とはいえない。しかも自主的にこのセンターを利用しようと思えば研修の要件を10日前までに連絡しなければならないという。にもかかわらず、8か月の間に2000人もの先生が、土曜の午後や日曜日を割いてセンターを訪れ、研修されたとのことである。自主的な研究意欲をかりたて、かくも先生方を引きつけるセンターの魅力とは一体何なのか、大いに関心をそそられるところである。

午後、所長が出動される。桐野所長とは、全教連の会合や所長協議会などで既に面識があるが、今回のように親しく面談するのは初めてである。所長室におさまられた姿は、センター設立を手がけ、センターと共に歩んでこれただけに、ここの主といった感じがびったりする。

所長は、自分自身に言い聞かせるような口調で話される。

「先生、研修といっても、わずかに3日か4日の研修です。このセンターに来て、よかったなあと思ってもらえるようにするにはどうすればいいか、わたしはいつもそのことを考えています。そのことが脳裡から離れません。そのためにまずモットーとしていることが、近寄り易い、親しまれるセンターということです。親切第一、来談者を待たせない、いつもこのことを全職員に話しています。威圧的な態度や横柄な態度を絶対に取ってはならぬと申しております。」

聞いているうちに、受付嬢の親切な態度、課長さんの行届いた応対ぶりが思い出されて、なるほどと深くうなづく。

「また、せっかくお出でになって調査や研究に励まれる先生方に、できるだけ楽しく、気持ちよく過ごしていただくために、環境をいつも快適な状態に整備するよう努めています。そのため、月に二回ほどは、全職員で草取りや花壇作りなどにも精出しています。」

そう言って細い目をいよいよ細くして笑われる。

「研修内容については、なまはんかな教育論や指導法の研修はしないことにしています。教育は永遠に続けたいせつな営みです。政策的なことや技術的なことより教育内容を深めていくことがたいせつだと考えています。学問として深く掘りさげて、それを初等教育、中等教育にどう降ろしてゆくかを考えなければなりません。一口に言えば教育センターの使命は、真・善・美の追求と、それを具現することにあると思います。」

今や情報過多の時代であり、言語過剰の時代でありますがこの傾向はますます激化してくると思われまふ。この中において、生徒たちが自分の頭で考え、自ら行動できるようにす

るには、何が真で何が善かを究める能力を養うことが必要ですが、そのためには真・善・美を追求させ、生徒自らがそれを体得し、具現できるよう教育することがたいせつだと思えます。このことを目標として研修をしているわけです。

「もちろん、研修のためには、所員各人の研究が必要になるわけですが、本年度からは、ひとり一研究と称して、全所員に、実際の教材を基にし、教壇実践をふまえた研究を積み重ねてもらっています。」

そういいながら、部厚くまとめられた全所員の研究原稿を見せてくださった。

午後3時からは所員会議を開かれるとのことだったので、その後は自由にセンターの概観を見学させてもらうことにした。幸い雨もあがり、建物の内外をゆっくり見て回ることができた。

翌二日めは、センターの組織機構や事務分掌の内容、また研修事業については研修内容設定の方法、研修計画立案の方法等につき、研修部長の説明を聞き、午後からはセンターの各部屋、施設設備をくまなく案内してもらった。

この機会に、一時間でもいいから現場の先生と一緒に研修講座に参加し、研修活動の実際を体験したいと考えていたがあいにく、その週までは休講期間で、その願いが果たされなかったのは残念であった。

二日間の見学を終わり、豊かな収穫を胸にたみながら、所員の方々のご好意を謝しつつ宮崎行の汽車に乗る。

鹿児島市のセンターは、隣接に2万坪の果有地をもち、計3万坪の敷地に恵まれている。そこには近々、芸林棟、技術・家庭科棟、資料館、体育館、講堂の建設が予定されている。ゆくゆくは、情報センターや特殊教育センター、放送センターなども建設されるであろう。あの広大な台地は、やがて文字通り、教育研究、教育研修のセンターとして、鹿児島県教育を推進する巨大なエネルギーの源泉となるであろう。

それにつけても、あのような大規模な研修、研究機関が各県ごとに建設されるようになることは、10年前には想像もしていないことであった。なぜ、かくもセンターの建設が強く要請されるようになったのだろうか。

20世紀の後半、すなわち現代の10年間における知識の蓄積量は、昔の100年以上のそれにも相当するといわれているが、学問の進歩により、新しく発見、創造される知識、技術の拡大は驚くべきものがある。したがって、このような知識、技術の発達、それともなう社会の変化に対応するため、学校教育における教科内容は、絶えず再検討を余儀なくされ、10年に一度は教育課程の改訂が要請される現状である。こうして、これからの学校教育は、知識や事実の質量両面の膨大な拡大に直面し、それらの要約すら教授することができなくなるであろうといわれている。したがって、教育内容の精選が強度に要請されるのは当然であって、教科の属する学問のねらう思考力、考察力を伸ばすことが求められるわけである。

今や、教育の目標は、大量の知識や事実の追求そのものではなく、それぞれの学問(教科)の本質に基づく、思考力、考察力を伸ばし、創造力を育成することが、現代社会の要請にこたえる教育の使命でなければならぬ。そして、この要請にこたえるには、われわれ教師が相互に研究、研修を深めそれを実践に移し、実践結果の評価を蓄積し、そこから最適な教育内容と指導の方法とを探究していく以外に道はない。

しかも、教科内容の改訂の速度は、今後いよいよ急速化し

ていくであろうから、常に新規な構えて、たゆまぬ研修を続けなければ、教師自身が、教科の内容を十分、体得せぬままに、事態は次々と移行するという悲劇を繰り返すことにもなりかねない。このような不合理と悪事態をもたらさないようにするには、各県において、教育哲学者、教育心理学者、教育原理学者、教育社会学者、その他専門の識者の協力を得てわれわれ教師が、確固たる教育観、最適の教育方法等、その本質を求めて、研修し、研究し、実践していく活動を推進することが、どうしても必要になる。この使命と機能を担うのが、教育センターの役割であり、教育センターの設立の大きな意義が、ここにあると思われる。

昨年、本県の小中学校の先生方を対象に調査したところ、自ら研修しなければならない問題点として、小学校では79%中学校では63%の先生方が、「学習指導」の問題を指摘されていた。このことから、本県の先生方の多くが、日々の教壇実践の問題に対する解決に苦慮しており、自ら研修することの必要を感じていることがわかる。

先生方のこの尊い意欲とエネルギーを燃焼させる方途を、本県においても真剣に検討しなければならないと思う。教育研究、教育研修の殿堂として、本県の教育センターの一日も早い完成を願う気持ち、切である。

学習指導のシステム化

所員 田 中 照

学習指導の効率化をめざして、最近教育のシステム化とか授業のシステム化がいわれている。

1 システム化とはどんなことか

システム化とは、目標をもってバラバラに存在する要素の機能を相互に依存させながら目標にそって最適な組み合わせを行ない、一つの複合機能統一体にまとめていくことであるといわれる。

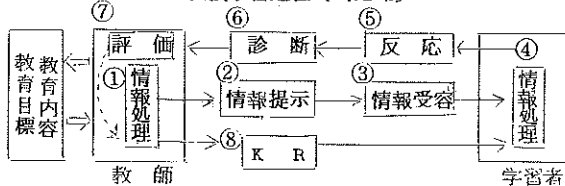
- ① 機能が小目的に応じて分化している。
- ② 分化しているものが全体として統合整理されている。
- ③ バラバラのものがひとつの方向にむかっている。
- ④ フィードバックのしくみが組み込まれている。
- ⑤ むだなく最適の条件で最高の効果をめざす。

教育のシステム化というのは、教育目標に合わせて教育内容を分析し、学習者の実態に則して効果的に教育活動ができるように組み立てて、教具や機器を使って能率よく目標への到達をはかることであろう。

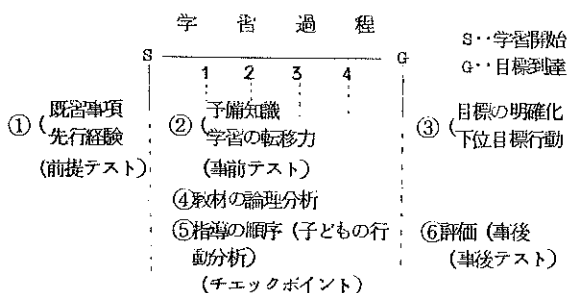
2 学習指導過程のシステム化

学習指導とは、教師と子どもの間で情報の相互伝達が行なわれ、その結果、子どもの行動が変容することであるといわれる。東京工大の坂元先生は、教授学習過程を次の図のように8つのステップにまとめている。

教授学習過程 (坂元昂)



このような過程のもとに、教師は学習指導案を作成するわけであるが、その手順を述べると、



①新教材に対する子どもの既習事項や先行経験を調査し、②指導前に新教材の内容について、どれだけ知っているかを調査する。③指導要領や教科書の目標を分析して、子どもの行動をどう変容させるか明確にする。④教材の論理分析を行ない⑤子どもの行動分析から指導の順序を決定する。学習過程の各ステップごとにチェックポイントを設けてフィードバックをしながら学習を進行する。⑥評価問題は指導前に目標を決定する際作成しておくこと目標がもっとも明確になる。評価の結果は子どものこれからの学習の方向づけと、教師の指導法改善の両方に利用されなければならない。

さて学習指導案ができると、実際の授業になる。①教材提示の効率化をはかること。子どもの学習意欲を喚起し、理解や思考を促進するような情報の提示を行なうには、教師の発問のくふうとともに黒板や掲示板の利用と、O.H.P.、テレビ、スライド等の活用も必要になる。②積極的な反応をうながすこと、子どもの学習内容が理解できたかどうか、挙手をさせたり、発表、討論、作業を通して確認しているが、「わかった人は手を挙げなさい」ということでは、個々の子どもの反応を適確に把握できないことがわかってきた。そこでアナライザーやアンサーボールなどの導入が考えられる。

③フィードバックを行なうこと。教師は子どもの反応結果を診断して、目標とどれだけズレているかを評価して、子どもに激励や修正情報を知らせることをフィードバックといっている。「よくできました」「もう少しだ」「...について考えてみなさい」等やさしくくわしいKR情報(フィードバックの一つの機能で学習活動の際の追加修正情報をいう)を与えるが、これはそれぞれの段階で即時に行なわなければ学習は成立しないといわれている。能力差のある学級の個々の子どもにやる気を起こさせ、能力に応じて力いっぱい学習させるためには多量の教材を準備し、学習者ベースで進行しなければならない。ところが人間教師には限界がある。同時に多数の子どもにちがった内容を教えることはできない。そこで教育機器の利用が必要になる。その中でもシンクロファックスは、価格が安く、市販シートもあり、またシートの自作も容易なためこれを利用すれば学習の個別化も可能である。

④評価を授業改善に利用すること。評価は授業後に行なってきたが、これでは学習の効率化につながらない。授業をいくつかのステップに分け、チェックポイントを決めてそれぞれの段階ごとに評価しなければいけない。正答の分析、誤答傾向の吟味によって、学習指導案の修正や授業方法の改善検討

が行なわれる。しかし各段階ごとに記録をとることは困難である。そこでアナライザーのタイプを使って記録をとれば簡単である。県下の研究校でも、個人記録の結果を学習プログラムの修生に利用する研究をお願いしたい。

以上学習指導システム化の視点について述べたが、学習指導システム化イコール教育機器の利用ではない。教育機器

の利用はシステム化の1つの要素に過ぎない。教育の効率化をめざして、教材の分析と構造化。目標を子どもの行動として明確にする。予想される子どもの反応とフィードバックの準備。多種の教材の共同開発。指導方法の研究等が最適の条件で組み合わせられることが、学習指導のシステム化であると思う。

学校経営上の困難点を調査して

所員 中島 範三

前年度より今年度にかけて県内小中学校の管理職者と一般教員約1200名の先生方の協力を得て、学校経営上の困難点、努力点、会議、校務分掌、学校評価・・・等に関して実態を調査したわけであるが紙数のつごうで学校経営の困難点の一部を記載し学校運営の基礎資料として提供したい。

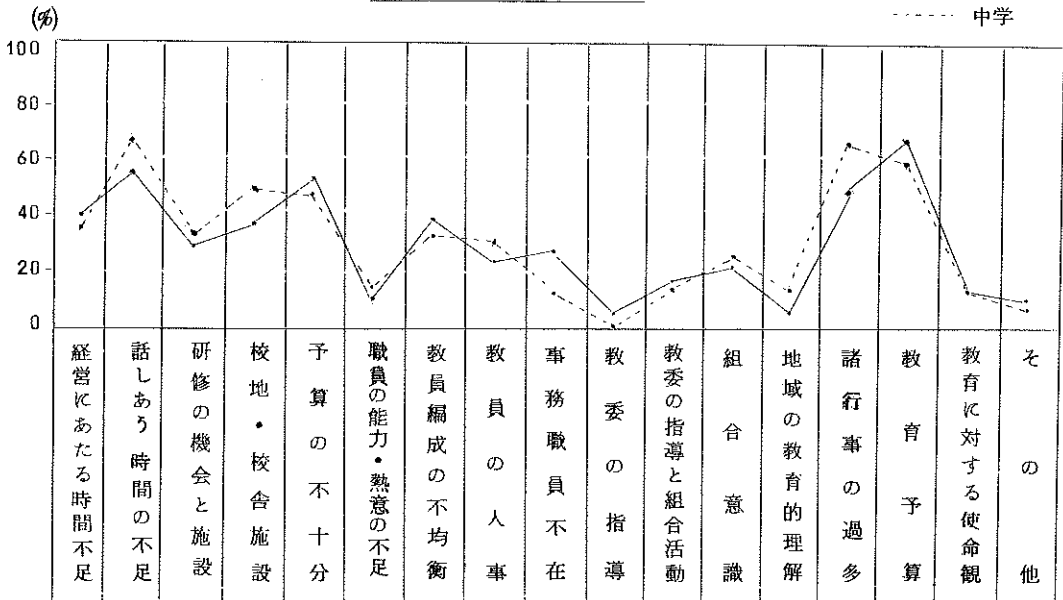
第1表

学校経営の困難事項	小学校長		中学校長		小学校(教務・教頭・校長)		中学校(教務・教頭・校長)	
	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位
1. 経営にあたる時間不足	24.8	10	27.8	8	35.8	7	32.9	6
2. 話しあう時間の不足	58.3	1	61.8	1	59.9	1	62.8	1
3. 研修の機会と施設	28.3	9	25.7	9	29.4	8	30.2	8
4. 校地・校舎施設	31.7	6	42.2	3	37.7	6	46.3	4
5. 予算の不十分	45.0	4	35.0	6	46.0	3	42.2	5
6. 職員の能力、熱意の不足	13.8	13	16.4	12	10.9	14	12.7	13
7. 教員編成の不均衡	36.9	5	29.9	7	38.3	5	31.6	7
8. 教員の人事	30.0	7	36.0	5	20.8	10	27.8	9
9. 事務職員不在	30.0	7	15.4	14	27.1	9	13.7	12
10. 教委の指導	4.0	16	1.0	17	3.2	17	1.3	17
11. 組合活動	17.3	12	18.5	11	16.5	12	15.4	11
12. 組合意識	24.2	11	24.7	10	19.2	11	21.3	10
13. 地域の教育的理解	2.8	17	13.4	15	4.4	16	11.3	14
14. 諸行事の過多	52.6	3	57.7	2	45.4	4	57.7	2
15. 教育予算	54.3	2	42.2	3	58.3	2	51.5	3
16. 教育に対する使命感	13.8	13	16.4	12	11.3	13	11.0	15
17. その他	5.7	15	5.1	16	5.9	15	4.4	16

第2表

学校経営の困難事項

—— 小学
- - - 中学



第3表

教育活動における困難事項	小学校(一般)		中学校(一般)		男		女	
	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%
1. 教育活動について話しあう時間がない	1	76.4	1	71.7	1	69.2	1	80.6
2. 研修の機会がない	3	63.8	3	64.0	4	56.9	2	72.8
3. 校地、校舎、施設が不十分	5	44.8	5	50.0	5	46.2	5	49.0
4. 学習活動、研究活動の予算がない	4	55.7	4	62.3	3	60.5	4	56.6
5. 熱意のあるものが少ない		4.4		6.3		6.2		4.0
6. 教員編成が不均衡である	8	17.4	7	22.7	7	22.3	9	16.8
7. 自分の希望する学校に勤務できない	10	9.3		7.0		6.7	10	10.3
8. 事務職員がいない		9.0		3.4		5.8		7.2
9. 教育委員会の指導が不十分		6.4		6.7		6.7		6.3
10. 指導助言を与えてくれる人がいない	6	20.5	6	18.0	9	14.9	6	25.1
11. 意識のズレや対立的感情がある	7	19.3	7	26.3	8	20.5	6	25.1
12. 父兄や地域住民の教育的理解がない	8	17.4	9	13.3	10	13.1	8	18.7
13. 諸行事が多過ぎる	2	67.0	2	66.8	2	66.1	3	68.0
14. 問題児の指導に追われる		7.5		4.5		4.3		8.4
15. 教育に対する使命感や信念がない		7.5	10	11.2		9.8		8.4
16. その他		5.9		7.7		7.0		6.5
17. 無 答		3.0		5.2		5.8		1.7

1 小学校と中学校との比較において

表1, 2, 3でわかるように管理者の場合も一般職員の場合も数的には若干の差異は見られるが一般的には類似した傾向を示し、特に一般職員の場合は第5位の「校地校舎の施設が不十分」までは順位において全く同じであり、しかも小、中の先生方が「話しあう時間がない」「行事の過多」「研修の機会がない」「教育活動の予算の不足」「施設の不十分」に意識が集中し、あとは分散的になっているところまで同一傾向を見せているが、小学校で指導助言を求める声が20.5%で中学校に比べて強くなっていること、特に注目されることは、中学校において「意識のズレや対立的感情がある」が小学校の19.3%に比し26.3%と7%も高くなっていることなどについては今後究明しなければならぬ点である。管理者の場合、「事務職員の不在が小学校長の場合7位で、中学校長の場合は14位となっているが本県の場合の事務職員の配置の実態からして当然のことであろう。

2 男女の比較において

困難点に対する意識の集中は表3を見てもわかるように、大体5位までは同じような傾向を示しているが、その順位やパーセントには若干のズレが見られる。特に女子職員の場合「話しあう時間がない」は80.6%、「研修の機会がない」72.8%と高率を示し、困難点を強く訴えている。また、「指導助言を与えてくれる人がいない」「意識のズレや対立的感情がある」などの項目について男子と比較し、5%~10%高く、しかも両項目とも25.1%で4分の1の女先生が指導助言を求めており、「意識のズレや対立的感情がある」という点は、大きな問題として取りあげるべきであろう。

3 問題点について

小、中と男、女の比較において、ごく一部にふれその問題点となると思われるもの1, 2を指摘しただけであるがその中の、「職員間の意識のズレや対立的感情がある」という問題と「授業やその他の教育活動について話しあう時間がない」という2つの問題について若干ふれてみたい。

① 職員間の意識のズレ

小学校において19.3%、中学校においては、「職員間の意識のズレ」26.3%で第6位になり約4分の1の先生が「意識のズレ」を感じていらる。同じ教育目標に向かって回転しなければならぬ共同体の中においても、教育上ある程度の意識のズレはやむをえないところであり、特

に中学校においては教科担任制でもあるので小学校と比較した場合多少のズレはあろう。教育観なり人生観なりにおいては、それぞれ異なるのも当然であろうが教育活動の困難点の中に「職員間の意識のズレや対立的感情がある」として4分の1パーセントを示していることは大きな問題である。今回の調査だけでどんな点に意識のズレや対立があるかは解明できないが、今後学校経営の中において、運営活動、教育活動両面において大きな支障をもたらす因となるであろう。特に管理者は、このような原因がどこからもたらしたものであるか十分究明し、これらの弊害を早く除去するように努めるべきであろう。

② 話しあう時間がない

人の子を育てる教師として、豊富な知識や高い教養も必要であろうが、教育の道を歩む共同社会において心と心のつながりをもっとたいせつに考えていかなければならない。

先にも述べたように今度の調査ですべての先生が「話しあう時間がない」ことを第一位にあげているが、今日の民主社会で話しあいというものが取り去られた場合、どうなるかについてはとやかく申す必要はないと思う。その話しあいの時間がないというのだから意識のズレというのも当然生じてくるであろう。だからと言って特別に(故意に)その時間を設けることには問題があろうし自然にその場が設定されていかなければ意味はない。そのためには事務、校務の簡素化と合理化によって職員を雑務から開放し教育の仕事に専念できるように配慮することが必要であろう。ところが小規模校などのを例にとってあげると、行政機関から流れてくる調査報告等は大規模校となんら変わらず、そのうえ事務職員はおらず大半は教頭をはじめ数人で事務職員の代行をしている状態で、事務職員の配当のない学校の教頭は、教頭としての役割はほとんど果たされていないというより果たすことのできない現状で、まして指導助言をするといった機会は皆無である。校務分掌等においても校務の種類は大規模校とかわらず一人で5種類も6種類もの校務をもっているのが普通である。これらの問題の解消には事務職員または事務補佐の配置が望ましくせめて小中併接校や隣接しているところでは、小中合同で事務職員1人は配置すべきであろう。教育研究と実践の発展のために必要な諸条件整備や組織づくりの助言者である校長・教頭が自己の仕事に専念できず事務職員の代行をしたり、出張や諸会合に追まわされていくのは教師間との接触は少なくなるし信頼感も生じないであろう。同様なことは担任教師についても言えることであって、担当の教科目ならば教科書時数

も多く、数多くの校務分掌、会計事務を担当しなければならぬ。そのため教材研究や子どもの指導に打ちこむ時間の余裕も少なく加えて中学校ではクラブ活動、入試のための準備教育や模擬テストなど教師に必要な以上の負担となり、教師と教師とのふれあいはますます少なくなり、また進学生徒と就職生徒の分裂化を増大し教育の本義である全人的な発展を阻害し豊かな創造性と個性の芽をつみとり型にはまった人間が

育てられようとしている。ここにも子ども同志の話しあい、子どもと教師の話しあい、体と体とのふれあいも少なくなってきたことは誠に寒心に耐えない。

困難点として行事過多の問題、予算の不足、施設、設備の不足、研修の機会が少ないなどあげられているがこれらについてもいろいろ問題点があると思われるが紀要60号をもって紹介したい。

能力・適性に 応ずる教育

所員 前田 和 茂

1 能力・適性等の重視

近年、「個性の伸長」とか「能力・適性に 応ずる教育」とかいうことが強く叫ばれるようになった。しかしながら、学校教育の立場からいえば、ひとりひとりの能力・適性を的確にはあくし、それを伸ばしてやるということは、いわば教育本来の営みであって今に始まったことではない。

したがって、個性を伸ばす教育ということは古くから叫ばれているのであるが、従来の学校教育のような画一的な一斉指導では、それがなかなか実を結ばなかったというところに問題がある。

今次の小中学校新学習指導要領では「調和と統一のある教育」ということが改訂の基本方針の一つにあげられているがその意味するところはひとつには、人間として必要な共通な資質の育成と個性的な資質の伸長、この両者の調和ある発達を図ろうとする考え、特にこれまで相対的に軽視されがちだった個性の伸長を重視しようとする意図が含まれている。

学習の個別化、教育の近代化をめざして学習指導法の改善が進められつつあるのもそのため、これと一体となって、能力・適性等に 応ずる指導が強調されてきたのである。

2 能力・適性等とは

昭和43年、「中学校観察指導調査研究に関する協力者会議」の答申によると「能力という語は、ある行為を遂行することが実際にできることを意味する。しかし、現在は遂行していないが、現在以上の訓練を特に加えることなく、ある行為を遂行することができるであろうと予見される可能性も『能力』とよばれることが多い。」また適性については「将来において期待できる能力という能力の第二の意味と、ほぼ同義に用いられることが多い。この場合、何々に適するという対象性が常に問題とされる。」とある。

また、「等」とは、興味・関心、意欲、性格の特性、職業・価値観・使命感等を指していると考えられる。

字義的には、一応これでも納得できるが、しかしそれはあくまで抽象的概念であって具体的にはどうかとなるとなかなかとらえがたい。

国立教育研究所の渋谷憲一氏によると、能力・適性の概念は、もともと仮説構成概念であり、立場によって見方が変わってくるものであるから定説はない。したがってある学問の立場からの学者の見解をうのみにしてかかるより、教育現場でどう実践に移すかを先に考え、実践研究を通して、仮説的概念を構成していく方が実践的だ、とする。

なるほど教育は、学問研究とは異なり、実践行為であるから「能力・適性等」についても、前述の一般的概念を基盤にすえながら、教育的実践の過程の中で共通理解に基づき具体的概念を構築し、次第に定着させていく方が自然であり、また有効だと思われる。

3 能力・適性等を伸ばす指導

(1) どうとらえるか

子どもの能力・適性を伸長させるには、ひとりひとりの、

能力・適性等をは握する必要があるが、その評価はなかなかむずかしい。従来、ともするとペーパーテストで測定した結果を学力や能力としてとらえ、それに基づいて一義的にものを言おうとする傾向があるが、単に一次的評価で能力・適性等がとらえられるとは思われない。

評価の資料は数量化するものだけではない。したがって言語表現、行動のパターン、思考のタイプ、学習態度など、学習活動におけるあらゆる表出現象をチェックし、能力・適性等診断のための情報を多様に収集し、多角的に評価することがたいせつである。そのためには、学習活動についての具体的な観察項目を設定し、授業観察カードに記録するか、録音テープやVTRに記録してそれから能力・適性を評価するための資料を得るなど、多様な方法を開発する必要がある。

また、子どもの思考のタイプをとらえるには、正答分析がたいせつだといわれる。一つの問題解決についても、幾とおりもの正答が予想されることが多いが、その幾とおりもの解答を導き出す授業こそが貴重である。正答分析をすることによって、子どもたちがどんな考え方をするのか、そこからひとりひとりの思考のタイプやレベルがとらえられ、能力評価の貴重な資料となる。

(2) どう伸ばすか

能力・適性を伸長するには、子どもがどのように考えるかという思考の構造や思考の論理をもっと重視しなければならぬであろう。これまで、教材の論理研究はさかんになされてきたが、学習者の思考の論理はブラックボックスの中におかれて、あまり手がつけられなかった。学習の結果だけを問題にするのではなく、なぜそうなのか、なぜそう思うのか、いわゆる「なぜ」を表出させることによって、ブラックボックスの中の思考過程を判断することが可能になる。そして、それを基に子どもの思考の論理に即して能力・適性を開発するのに効果的な授業をどう組織すればいいのかを究明する、そういう方法論的な新しいアプローチのしかたが研究されるべきだと思ふ。

能力・適性を伸ばす場面としては、個別相談によって、悩みや問題を聞いてやり、個性の伸長を阻む要因を除去するよう援助してやる、いわゆるカウンセリング的な方法と、授業中で、個人の能力・適性をとらえ、それに応じて学習の最適化をはかる、いわゆる学習指導における能力・適性の伸長とが考えられる。学習指導における能力・適性の伸長は、教材の論理と子どもの思考の論理の両面から、学習のプログラムをどう構成するか、また学習個別化の機能を拡大するため、どんな教育機器を導入するか、能力に即して教材の複雑化をいかにして図るかなど、今後、実践研究を通して学習指導改善の方法を追究していくことがたいせつだと思ふ。

要するに能力・適性に 応ずる教育は、概念的論争はすいぶんさかんになったが、実践となるとまだ未開拓な面が多い。現場の実態に即して、いかに具体的な実践を深めるかが、これからの大きな課題であろう。

教育評価研修会の反省とこれからの研修のあり方

—— アンケート調査の結果から ——

所員 香月和男

1 教育評価研修会のこれまで

当研究所では、昭和43年度から、〈教育評価〉というテーマで研修会を開催してきたが、この4年間で約1300名の受講者を送りだしてきた。この研修会は、先生がたの自主参加という形であるにもかかわらず、はじめ予想された以上に好評で、本年度は、佐賀、武雄、唐津、伊万里会場の中、佐賀会場を2か所設営しても収容しきれず、多くの先生がたをおことわりした程である。本稿では、この教育評価研修会をふりかえり、これからの教員研修のあり方を考えてみたいと思う。

2 教育評価研修会の成功をささえた要因

当研究所の行なう研修が、受講の先生がたから好評をいただいている原因としては、つぎのものが考えられる。

① テーマに今日的課題を選んだこと

イ、〈評価〉が、教師の教育活動の中では、〈指導〉と表裏一体をなす重要な活動でありながら、まだ十分、理解されていない現状と、一方、心ある教師はそれに気づきながらも、研修の機会に恵まれないという実態をふまえて、〈教育評価〉を研修の中心テーマにとりあげ、しかも、それに

ロ、毎年、教師に関心の高い今日的課題（たとえば、45年度の〈問題の作り方〉、46年度の〈指導要録と通知表〉のような）を、テーマの中に織りこんでいったこと。

などが、まず、教師の参加意欲をそそる一因となったのではないかと考えられる。

② 内容に具体性があったこと

理論だけに偏せず、できるだけ具体的事例を盛りこみ現場向けの内容構成にしたことも、「非常に有益だった」と喜ばれた原因であろう。

③ 自主研修の形をとったこと

先生がたの自主的参加による研修であったため、受講者全員に前向きな意欲が見られ、それに支えられて「居ねむり」や「蒸発」のない研修会がもてているのではないだろうか。

④ 研究所の周到な準備があったこと

当所では、研修実施前約一か月間、研究業務を停止して、討議を重ね、内容を検討し、準備に最善をつくしているが、ここにも、研修会を成功させてきた原因があると思われる。

3 アンケート結果にみられる教師の高い研修意識

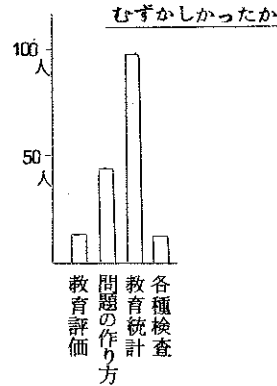
当所では、毎年、研修後、アンケート形式で先生がたの研修会に対する感想、希望などを調べ、反省の資料としているが、本年度のアンケート結果からも、先生がたの研修意識の高いことがよみとれる。

① 教育上有益なものは、難しくとも研修したい

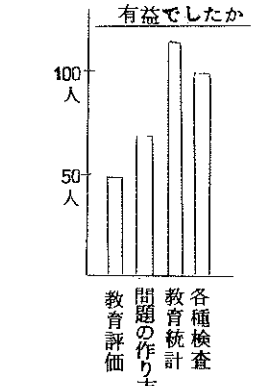
つき②二つのヒストグラムは、調査項目〈どの内容がむずかしかったか（第1図）〉と〈どの内容が有益でしたか（第2図）〉に対する解答結果であるが、これと、圧倒的な研修会継続の希望（アンケート解答者全員）から、内容がむずかしいものでも、子供の教育に役立つも

のであれば、ぜひ、研修に参加したいという先生がたの高い研修意識をよみとることができる。

第1図 どの内容が



第2図 どの内容が



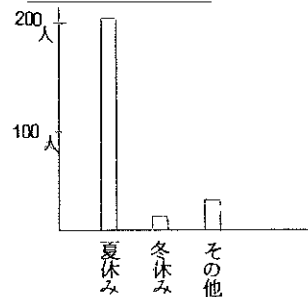
② 研修内容を高め、かつ、広げてほしい

2回目、3回目の先生がたには、「もっと高い内容のものがほしい」という希望が強く、また、来年度の希望研修内容については、〈教育評価〉以外のたとえば〈教育工学〉を望む声も高い。

③ 研修日数が足りない、宿泊研修を考えてほしい

また、研修日に対する希望では、つぎの第3図のように、夏休みの希望が多いが、意見としては、日数が足りない。できれば宿泊研修までいってほしい など、充実した研修を望む声が非常に強い。

第3図 希望する研修時期



4 これからの研修の一つの方向

当研究所では、今後も、前述のアンケート調査結果にみられるような先生がたの研修に対する強い要望に応じて、内容のある研修をすすめていかねばならないが、その具体的手だての一つは、現在、計画中の〈教育センター〉の早急な実現であろうと思う。研究・研修設備の整った、宿泊可能なセンターにおいて、これまでの当所の〈教育評価研修会〉の成功を支えてきた要因と考えられる〈適切なテーマ〉、〈具体的な内容〉、〈教師の自主性〉、〈周到な準備〉などに、十分気をくはった研修を、先生がたにサービスしていくというあり方が、これからの教員研修において指向されるべき一つの方向ではあるまいか。

紀要紹介

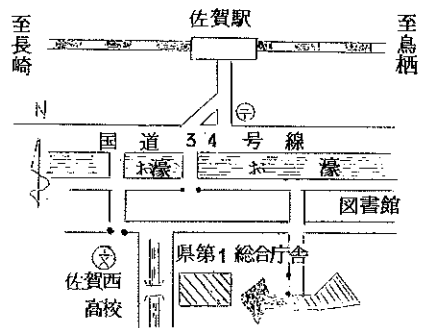
今日、個人差や能力差に応じる学習指導が盛んとなえられているが、今回は、能力に応じた学習指導の改善に関する研究紀要を紹介いたします。

1. 子どもの学力向上のための学習指導の改善に関する研究
S 4 6.3 埼玉県立教育センター
教育機器を活用して学習効果を高めるための基礎的条件の研究
 - VTR, アンサーチェッカーによる反応強化の方法
 - 学習活発化のためのOHPの使用法
 - シート学習を利用した指導法の研究
2. 学習指導における視聴覚的方法の研究
S 4 6.3 鳥根県立教育研究所
簡易L, L, OHP, プログラム・アナライザーによる学習指導の実験研究を行ない、教育機器利用の英語指導のありかたに関する事例や、その効果、問題点についての資料を提供したものを。
3. 子どもの発達と学習との関係に関する研究
S 4 6.3 神奈川県立教育センター
漢字の指導法や生活環境の違いによる子どもの漢字習得の状態を比較検討して、子どもの読字力および書字力の発達の様相を明らかにするとともに、漢字習得の要因やしぐみについても考察研究してある。
4. ひとりひとりの子どもを育てるための指導法の研究
S 4 6.3 徳島市教育研究所
 - 教育するものと受けるものとの人間的な触れ合いを重視しようという基本姿勢から、国語科における個の学習の成立をめざす指導法について研究したものを。

- 機器の利用による学習指導では、その機器の機能をじゅうぶん発揮できるため、どのような内容を、どのような学習の場で、どのように活用するか、理科の実践指導をとおして研究をすすめてある。
5. 学習指導における能力評価の研究
S 4 6.3 山形県教育研究所
授業過程において、能力をは握する視点と方法を実践的に探究し、学習指導の改善に役立たせようとするもので、1時間の授業過程における能力評価の場面、内容・方法を実証的に探究してある。
 6. のぞましい指導過程に関する研究
S 4 6.3 四日市市立教育研究所
学習指導過程においては、ひとりひとりの子どもの学習成立を期待しなければならない。一斉授業の中で最大限に個の成立を期待する指導過程を、社会科の実践授業を通し究明してある。
 7. 学習指導の現代化に関する研究
「真の理解をえさせるために、学習指導を、どう改変すべきか」を研究テーマに、数学教育の現代化、英語学習の現代化の一方法として、機器を学習指導に、どのように役立たせるか実践をとおして研究してある。
 8. 自己開発をめざす教育
S 4 6.3 愛媛県教育センター
 - 中学校国語教材の説明的文章をとりあげ、要旨は握の実態とその指導についてまとめたもの。
 - 地理的見方考え方を育てるための、統計資料活用への能力について研究したものを。

(係 前間)

みちしるべ



あとがき

- 教育重視の世界的動向に呼応して、わが国でも各県それぞれに教育振興の施策がとられています。教育の総合的研究、研修の機関として教育センターの設立が実現されているのもその一つの現われでしょう。
本県もようやくその機運が熟し、センター設立の構想が練られています。本県教育の向上のために、長期の展望に立って、他に劣らぬ、すぐれたセンターを設立することは、県民全体の願いに通ずることだと思います。
その意味で、冒頭の「鹿児島県教育センターを訪ねて」は、センター造りの基礎資料として参考になる点が多々あると思います。ご一読ください。
- 「学習指導のシステム化」は、学習指導の改善をめざす理論と方法について概説したもので、現場の実践に役だつところが多いと思います。「能力・適性に応ずる教育」と合わせて参考にいただければ幸いです。
- 今日、マネジメントの課題は、人間関係だといわれますが、「学校経営の困難点を調査して」は、学校経営改善点の一面を明らかにしたものとて注目されます。

第14号

発行年月日 昭和47年2月1日
 編集・発行 佐賀県立教育研究所
 佐賀市城内1丁目6-5
 TEL④2111 内線437
 印刷 みくりや印刷